

利尻島におけるヤブボロギク（外来植物）の記録

五十嵐 博¹⁾・小杉和樹²⁾

¹⁾ 〒066-0066 北海道千歳市大和2丁目4番13号 北海道野生植物研究所

²⁾ 〒097-0401 北海道利尻郡利尻町杵形字富士見町 利尻島自然情報センター

Record of *Senecio jacobaea* from Rishiri Island, Northern Hokkaido

Hiroshi IGARASHI¹⁾ and Kazuki KOSUGI²⁾

¹⁾Wild Plant Research Institute, 13-4-2, Yamato, Chitose, Hokkaido, 066-0066 Japan

²⁾Informative Center for Natural Environment of Rishiri, Fujimi-cho, Kutsugata, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0401 Japan

Abstract. An alien plant, *Senecio jacobaea* was newly recorded from Rishiri Island, northern Hokkaido. The plant was found at the car park of Hokuroku camp site located in Oshidomari. We exterminated it after taking photos and making a sample. It is a new kind of plants ever recorded in Hokkaido.

ヤブボロギク *Senecio jacobaea* L. はキク科キオン属のヨーロッパ原産の帰化植物（以降は外来植物とする）であり、北海道では過去に報告がなかった（五十嵐，2001）。小杉は利尻山鷺泊登山口の入口となる北麓野営場で見慣れないキク科植物を2011年7月29日に確認したが不明であった。2008年に整備された新しい駐車場脇に草丈1mほどの個体が当初4株ほど確認されたので、外来植物と判断して画像を五十嵐に送り同定を依頼した。

8月10日に送られた画像を五十嵐がイギリスの図鑑類などで同定した結果、ヤブボロギクと判明した。各種の図鑑類で和名はヤブボロギク、ヤコブコウリンギク、ヤコブボロギクと複数の和名が報告されていた。グレイ＝ウイリソン（1996）、清水（1997）では「家畜には非常に毒性が強い」との記載もあるため、五十嵐は小杉に本種の証拠標本の採集と駆除を依頼した。北海道では新しく確認された外来植物であるため、その後の経緯も含めて報告する。

本種が掲載されている文献を以下に年代順に整理するとともに、過去の報告がどのようなものであったかを

明らかにした。

齊藤（1981）の文中にはヤブボロギクの和名が見られるが、タイトルはヤコブコウリンギクで、本ニュースの監修者である奥山春季氏が補記で加筆（後記：詳細は太刀掛 1998）している。齊藤（1984）の確認地は1983年の奥志賀で2箇所とも採集された環境は後記する清水（1997）同様に外来植物の多く見られる別荘地であった。

江東区総務部広報秘書室（1986）の目録にはヤコブボロギクが掲載されているが写真や説明文などは見られなかった。

竹松・一前（1987）では、ヤコブボロギクの和名で掲載され、語源の項に、「種小名は St. James の日（7月25日）頃に開花するため。和名は種小名（*jacobaea*）の読み方による」とあり、「ヨーロッパ原産。寒帯～温帯に多く、亜熱帯にも分布する。地域的にはヨーロッパ、アフリカ、西アジア、オセアニア、南北アメリカに分布する。日本にはまれに帰化している。雑草化はしていない」と報告され、「種子の伝播は風、雨、鳥や羊などの動物、人間による。根茎切片による再生力は弱く、刈取りや羊に食われ



図1-3. 利尻島鴛泊登山口「北麓野営場」で確認されたヤブボロギク。1：花序，2：駐車場縁石付近の生育状況，3：駐車場法尻から平坦部にかけての生育状況。

ると生育が劣る」ともある。「生育地は畑地，牧草地，路傍，荒地，林縁などに生育する。乾いた所に多く。湛水条件に対する適応性は小さい。土壌の種類を問わず，肥沃地からやせ地までに適応する」ともあるので駆除は難しそうである。

江東区総務部広報秘書室（1991）の目録にはヤブボロギクが掲載されているが，写真や説明文などは見られなかった。

グレイ＝ウイルソン（1996）では，「英名 Common Ragwort（コモン・ラグワート）。和名サワギク（この和名は間違い）。かなりがっしりした植物で，ふつう束生し，有毛または実質的に無毛である。深緑色の葉は互生し，長楕円形で，羽状に切れ込みがある。下部の葉は柄があり，しばしば花期には枯れる。上部の葉は小さめで，しばしば分裂が多く，柄のない基部で茎を抱く。明るい黄色の花はヒナギク（この和名は疑問）に似ており，直径15～25mmの頭状花で，枝分かれした頂部が平たい大きな花序をなす。個々の頭状花は，12～25個の長い舌状の小花をつける。少数の総苞は均一に覆い包み，先端が黒色をしている。分布は最北地を除

く全域，生育場所は耕地や荒地に雑草として広まっている。牧草地，放牧地，川の堤防，道路脇，砂丘や海岸の小石浜にも生育する。特記事項は家畜には非常に毒性が強い」の記載があり，「二年草または多年草，草丈は80～150cm，花期は6～11月」とあるため，前記したように駆除に踏み切った。

清水（1997）では，ヤブボロギクで掲載され，標本：南牧村西武観光開発地 1600mとあり，説明文中に「ヨーロッパでは著名な家庭薬草。カリフォルニアでは家畜に有毒な帰化植物だという」の記載があり，採集環境の自然度を物語っている。

山口（1997）では，付表・日本の帰化植物一覧表の中に，ヤブボロギクの和名が掲載されているだけである。

太刀掛（1998）では，「斉藤吉永（1981）新帰化植物 ヤブボロギク。レポート日本の植物，(9):79. 1980年9月29日，長野県南牧村の八ヶ岳東麓で見つけた。北村四郎博士に標本を送り調べていただいたところ，ヨーロッパからシベリアに分布する *Senesio jacobaea* Linn. で，ヨーロッパではありふれた植物であること。和名をヤブボロギク

として北村博士が3年程前にある書房から依頼された書籍「ヨーロッパ植物の和名」に記載したもので未出版であるという。(補記)和名は北村博士が1947年に発表されたヤコブコウリングクがあるので(植物研究雑誌 21:55),それを採用した(奥山). 齊藤吉永(1984)ヤコブコウリングクの第2産地も信州. レポート日本の植物, (20):192」など発見当時の様子が掲載されている。

清水(2003)では、「ヤブボロギク(ヤコブコウリングク、ヤコブボロギク). 二年草または多年草. 茎は高さ30-150cmになり, 直立し, 下中部は分枝せず, ふつう柔毛がある. 葉は茎の下部では長さ10-20cm, 柄があり, 葉身は頭大羽状深裂で, 花期の夏にはふつうしおれ, 中上部の葉は1-2回羽状に分裂し, 基部はやや茎を抱き, 裂片は葉軸に直交する. ふつう葉の下面には柔毛がある. 頭花は径1.5-2cmで, 多数が茎の上部に散房状につく. 総苞は長さ7-10mm, 総苞片は1列につき, 狭卵形, 鋭頭で長さ1/4ほどの副片が数個ある. 冠毛は白色, 長さ4mmほどで, 花後に脱落する. 舌状花は12-15個, 濃黄色. 瘦果は長さ約2mm, 筒状花では有毛, 舌状花では無毛である. 染色体は $2n=32, 40, 80$. 原産地はヨーロッパ. 渡来は, 1980年齊藤吉永が長野県八ヶ岳東麓で採集し, 北村四郎が同定し提唱したヤブボロギクの和名とともに, 齊藤により発表された(1981 レポート日本の植物 9:79). しかし, 北村は1947年すでに中国産のこの種に対してヤコブコウリングクの和名を与えている」と過去の確認の経緯を整理している。

近田ほか(2006)では, ヤブボロギク(ヤコブボロギク)がP.218~219の都道府県別帰化植物分布表に東京, 長野と記載されている. 太刀掛・中村(2007)に「帰化植物を楽しむ:132, 218」とあるが, P.132はナルトサワギクの掲載であり間違いである。

太刀掛・中村(2007)では, 本種の掲載文献名として, 「続々江東区の野草:169, 長野県植物誌:1113, 外来種ハンドブック:344, 日本の帰化植物:209, 帰化植物を楽しむ:132, 218などとともに, 齊藤吉永(1981)新帰化植物ヤコブコウ

リングク. レポート日本の植物, (9):79, 齊藤吉永(1984)ヤコブコウリングクの第2産地も信州. レポート日本の植物, (20):192を掲載し, ヨーロッパ原産. 1980年渡来. 本州(東京都, 長野県)で帰化」とまとめている. 本書での和名は清水(2003)同様にヤブボロギク, ヤコブコウリングク, ヤコブボロギクの3つを紹介している。

金井ほか(2008)の分布図には長野県, 東京都にヤブボロギクが図示されている. 手持ちの図鑑類などでは, このように3つの和名が報告されているが, 最近ではヤブボロギクで統一する見解のようである. 東京都江東区に関しては目録に掲載されているだけで詳細は不明であるが長野県で確認された2箇所はともに別荘地であった. 清水(1997)文中の「家庭薬草」から判断すると各地で植栽されている可能性は否定できないが, 五十嵐は庭に植えたものを未確認である. 道内の園芸植物などに詳しい笠康三郎氏との私信では本種を未確認との返事を頂いた。

2011年8月13日, 小杉は佐藤雅彦氏と現地で本種の駆除を行った. 最初, 駐車場の縁石と緑化用マットの境目だけの分布と思っていたが, 植生マットの施工が終わる盛土の法尻から平坦部にかけて分布が確認され, 駆除個体は花を咲かせているもの124個体となった. また, 法尻から平坦部には, 花茎を持たない実生個体が多数確認されたため, 9月19日にそれら90個体を更に駆除した。

駐車場の縁石と植生マットの境目に分布している個体は草丈1m前後の大型の個体で, 法尻から平坦部の個体はそれ以下の中型から小型の個体であることから, 最初に駐車場縁石付近に定着し, 結実した種子が平坦部に運ばれたものと推測された. 法面は植生マットで保護されていることに由来すると思われるが, 本種の定着は確認されなかった。

現地の駐車場は2008年に整備されたもので, 緑化は種子無し植生マットで施工され, 使用した盛土も島内の砂防ダムからの浚渫土ということで, 工事による侵入とは考えにくい. そのため観光客や登山者の靴底に着いてきたものとかを疑わざるを得ない. しかし, 前記したように国内では東京都及び長

野県での報告例しか見当たらず、ヨーロッパではありふれたふつうの植物であるが国内では珍しい種であるため伝播の由来を判断するのは難しい。キク科植物は、竹松・一前（1987）にもあるとおり、風散布など各種の繁殖形態があるため伝播由来を確定しにくい仲間である。

本種は1947年に北村四郎博士が植物研究雑誌21:55に発表した中国産の種に対して和名：ヤコブコウリンギクと命名した経緯があるが、国内での初確認記録は1980年の長野県八ヶ岳周辺であり、ついで1983年の長野県奥志賀、1986年出版の東京都江東区のみである。齊藤（1984）の文中には「1947年（昭和22年）にすでに北村四郎博士によって和名が植物研究雑誌に発表されているが、現物が当時日本に帰化していたかどうかは不明であったものと考えられる。というのは北村博士が我が国でも文学などによく現れる種だが和名がないので不便でとの私信を頂いたことがあるが本物より名前が先になったものであろう」との記載が見られる。これが当初の命名の真実であろう。園芸種を含む日本の植物名を網羅した、杉本（1965）に本種が掲載されていないことも、本種が1980年以前に我が国に渡来していない証明と思われる。

今後も継続的な確認作業を行い、駆除に努める予定である。なお、証拠標本は利尻町立博物館と北海道大学総合博物館に収めた。

参考文献

グレイ＝ウイルソン、1996。高橋良孝・日本語版監修。野草の写真図鑑。p.261。日本ヴォーグ社、東京。

五十嵐 博、2001。北海道帰化植物便覧。北海道野生植物研究所。札幌。195pp。

金井弘夫・清水建美・近田文弘・濱崎恭美、2008。都道府県別帰化植物分布図。p.248。小金井。

近田文弘・清水建美・濱崎恭美、2006。帰化植物を楽しむ。p.218-219。トンボ出版。大阪。

江東区総務部広報秘書室、1986。続江東区の野草。江東区。p.202。東京。

江東区総務部広報秘書室、1991。続々江東区の野草。江東区。p.169。東京。

日本生態学会、2002。外来種ハンドブック。p.344。地人書館。東京。

齊藤吉永、1981。新帰化植物ヤコブコウリンギク。レポート日本の植物、(9): 79。

齊藤吉永、1984。ヤコブコウリンギクの第2産地も信州。レポート日本の植物、(20): 192。

清水建美、1997。長野県植物誌。p.1113。長野県植物誌編纂委員会。長野。

清水建美、2003。日本の帰化植物。p.209。平凡社。東京。

杉本順一、1965。日本草本植物総検索誌Ⅰ・双子葉篇。六月社。大阪。832pp。

竹松哲夫・一前宣正、1987。世界の雑草Ⅰ・合弁花類。p.234-238。全国農村教育協会。東京。

太刀掛 優、1998。帰化植物便覧。p.183。比婆科学教育振興会。広島。

太刀掛 優・中村慎吾編。2007。改訂増補・帰化植物便覧。p.439-440。比婆科学教育振興会。広島。

山口裕文、1997。雑草の自然史・たくましさの生態学。p.214。北海道大学図書刊行会。札幌。